

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520503

研究課題名(和文)名古屋言葉絵葉書に関する方言研究と音響研究の学際

研究課題名(英文) Interdisciplinary of dialectology and acoustics on the Picture postcards of Nagoya dialect

研究代表者

犬飼 隆 (INUKAI, Takashi)

愛知県立大学・情報科学部・客員共同研究員

研究者番号：20122997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：現存する40枚の「名古屋言葉絵葉書」のうち32枚8組は大正10年頃8枚2組は昭和5年頃の名古屋市大須の実際の光景を描いていることを確定した。方言研究は、書かれた台詞が1920年代名古屋の下町言葉の克明な記録であり、場面に応じて上町言葉、地方訛り、芸能用語がまじると解明した。音響研究は、名古屋弁の変母音のフォルマントが平行線状を描く特徴と、現代において曲線状に変容する傾向、聴取実験で若年層には後者が「らしい」と感知されることを解明し、標準語からの変換システムを試作した。

研究成果の概要(英文)：We made clear the following. In existing "Ngagoyakotoba-Ehagaki[Picture postcards of Nagoya dialect]", 32 cards were published on 1921~3 and 8 cards were published on 1930~1. The pictures are real sight of that time. The describes, in graphic detail, are real low-lying area of the Nagoya city dialect. Some upper class dialects, country side dialects, and vocabularies of show business are mixed, because many pictures portray the serving customers business. This is a superior record of recent past Nagoya dialect and customs. On the distinguishing feature of the Nagoya dialect, two vowels blends into one, it is clearly described that the formant track goes strait in the typical old pronunciation, and changes to carve in the now a days pronunciation. It is interesting that young generation aware latter as typical dialectal pronunciation. Transformation system from standard Japanese to Nagoya dialect, we made, acquire 90% accuracy.

研究分野：日本語学

キーワード：名古屋弁 方言絵葉書 変母音 音声認識 風俗 日常生活 方言差

1. 研究開始当初の背景

代表者犬飼と分担者金森は、かねてから名古屋方言に特徴的な三つの変母音を対象にして、良好な録音を残しその音響的・音声的な性質を解明する研究に従事していた。いわゆる名古屋弁ではア-イ(ア-エ)、オ-イ、ウ-イの二つの母音が接続すると一つの融合した変母音として発音されるのである。

この研究事業を開始する以前に、これらの変母音の聞き分けは50歳代(この報告執筆時は60歳代になっている)が下限であること、その世代も自身で発音を生成できるのは「大根」などア-イの融合から生ずる変母音に限られ、オ-イの融合した変母音は実現がまれでありウ-イの融合した変母音は生成できないことが判明していた。70歳代より上の世代においてもウ-イの融合母音は生成可能な音韻環境でも実現しない人が多いこと、変母音の実現可否には男女差があり、女性はア-イの融合以外の変母音を生成しない割合が男性より多いことも判明していた。また、変母音の実現は日常語彙で多く漢語では少なく、録音するときに緊張を強いられると実現しない傾向が顕著に認められた。録音したものを母音のフォルマント抽出を行い、伝統的な発音が良好に実現した時は融合した二母音の一つになって各フォルマントが平行状態を示すこと、言い換えると一つの変母音として実現することを確かめていた。

その研究では単語や文章を被験者によりみあげていただいで録音する方法を取っていたが、使用した文例は研究者がつくった作例であり、名古屋方言の文例として適切であるという保障はなかった。被験者が自然な発話を実現し難いとか自分はこの言葉遣いをしないと内省するという問題をかかえていた。そこへ名古屋市博物館から研究対象である「名古屋言葉絵葉書」の存在を知らされた。近過去のものではあるが、確かな名古屋方言会話の文例として利用できるかと考え、研究に取り組むことにした。書かれた台詞のほとんどが対話になっているので、被験者によりみあげていただければ作例より自然会話に近い文脈になると期待したのである。

2. 研究の目的

いま全国で方言が消滅・変容しつつある。大都市である名古屋の方言も例外でない。かつての伝統的な名古屋弁を正確に話す人はほとんどいなくなり、多くの人は名古屋風に変容したところをもつ共通語に近い言葉を話している。この研究によって、過去に話されていた方言の正確な実態の再現を試みる。

そして、それを伝統的な言葉遣いを保持している人によりみあげていただいで録音することにより、過去の方言発音を再現し良質の記録として残そうとする。また、その結果を分析して典型的な名古屋方言の発音における変母音の性質を解明し、あわせて、現在それがどのように変化しつつあるかを知ろう

とする。その結果をもとに名古屋方言音声の合成や共通語との自動変換システムの開発をめざす。

そのために、まず、対象である「名古屋言葉絵葉書」がどのような性格と内容であるか書誌を明らかにする。

なお、補助金申請時には介護現場における回想法にこの研究を活用する計画を持っていたが、補助金を受け入れた大学の研究倫理審査において個人情報保護の観点から実施方法に強い制限を受けたために、その研究は事実上実施できなかった。

3. 研究の方法

当該の「名古屋言葉絵葉書」にあたるものを収集し全体像を整理する。名古屋市博物館と同館学芸員であった井上善博が多くのもを所蔵していたが、その他にも存在することが犬飼隆・成田道子「名古屋言葉絵葉書の書誌的研究」(『愛知県立大学国際文化研究科論集 日本文化編第一号』2010.3)で判明していたので、インターネットオークションによって収集に努め各所蔵者に連絡をとって、全体でどれだけ存在するかを調査した。

調査協力者を確保するには以下のようにした。知人の紹介により、名古屋市で生育し生活している50歳代以上の方に協力を依頼した。郷土文化に関する有志の集まりの場に資料を持参して話し合う方法も一部に実施した。研究事業のはじめは名古屋市内と周辺在住の様々な方々に協力をお願いしたが、第二年度の終わり頃に名古屋市中区の大須で営業される美容室Gを会場として定点観測に入った。それまでの調査によって絵葉書に描かれている光景が大須の実景である可能性が高くなり、その百年後の現地に在住して名古屋方言を日常に話す方々に集まっていたことができただけからである。期間延長を含めて事業年度の後半二年間は専らこの方々を協力者として調査した。さらに、名古屋市中心部で生育し俳優として長年活動しておられる方の調査参加・協力を得た。場所は調査協力者の自宅、店舗、大学内の研究室、録音室など、すべて静謐な室内で行った。

この絵葉書は、上半分に絵を描き下に登場人物の台詞を変体仮名で書いている。それをコピーしたものと台詞を現行の字体に直したものと更にそれを全文平仮名に書き直したものを資料として作成した。調査協力者は年配の方が多いため全体をA3サイズに拡大コピーした。それを持参して調査協力者とともによみ、絵に描かれている光景や登場人物の服装や道具類や室内の様子などについてインタビューを行ってその場面がどのようなことをあらわしているか解釈を試みた。あわせて、書かれている台詞のなかの注目すべき語彙・言葉遣いについて調査協力者とともに考えた。名古屋方言の言い回しと目されるものについては、知っているか御自分が使うか誰かが使うのを聞いたことがあるか、使

わないとすれば御自分ならどのような言い方をするかなどを同時にたずねた。

また、標準語と名古屋方言との変換システムを構築する目的のために、語彙の認知度の調査を行った。先行文献やこれまでの調査の蓄積で得られた名古屋方言の語彙を表にしたものを作成し、知っているか御自分が使うか誰かが使うのを聞いたことがあるかなどを筆答していただいた。

インタビューの後に、必ず、その日によんだ絵葉書の台詞を口頭でよみあげていただき、ICレコーダで録音した。台詞は対話になっているものが多いので、二人の調査協力者に役柄を演じる形でよみあげていただいた。できるだけ多くの音声資料を得るために役柄を相互に交代して行った。

録音データを持ち帰りコンピュータ上で音響分析した。各変母音のフォルマント軌跡に注目して特徴を解析した。解析した結果は図像と折れ線グラフにして明瞭化した。

また、それまでに蓄積した録音データを整理してサンプル音声を作成し、それを使って聴取実験を行った。複数の発声者と複数の実現音声を選び、「名古屋弁らしく聞こえる度合い」を段階に分けて答えていただいた。

それらの実地調査と並行して、愛知県と名古屋の方言に関して記述した文献を調査した。とくに解釈の困難な語彙と、使い方に位相差や地域差の認められるものについては、可能な限り精査をつくした。愛知県以外の方言とのかかわりが認められる例もあり、全国方言辞典の類も調査した。また、絵に描かれた光景を解釈するために、大正時代と昭和時代初期の写真集や編年記録の類、風俗史、世相史、服装史、物価史、芸能方面に関する諸文献を調査した。

4. 研究成果

方言研究としては1920年代に名古屋市中心部の一つの地域で話されていた方言を記述した良質の資料を斯界に提供する結果になったことが成果である。音響研究としては名古屋方言の特徴である三種類の変母音について、その音響特徴をこれまでになく精密に観察しその特徴が現代では変容している実態を明らかにしたことが成果である。また大量の良好な方言発音の録音データを蓄積することができ、その資料は今後の研究のための基盤となる。下に詳しく記述する。

絵葉書の絵柄と台詞の性格を知るためにまずこれらの絵葉書が全体でどのようなまとまりをなしている、いつ頃どのようにして刊行・発売されたか、書誌的な事情を明らかにした。結果は、印刷の色を変えて再刊されたものを一種類と数えると全体で40枚の絵柄があり、それらは各4枚ずつの組をなしている十組あり、すべて同じ刊行主体が作成し一組ずつ袋に入れて発売したことが判明した。これらの他に少し後に別の刊行主体が発売した類似の絵葉書8枚一組が存在する

が今回の研究では基礎的調査にとどめた。刊行事情については研究協力者である井上善博が主に担当して明瞭な結論を得た。八組32枚は大正10～12年に、二組8枚は昭和5～6年には刊行されていたと判明した。刊行の主体は名古屋の繁華街広小路通りで文具を主にプロマイドや玩具なども販売していた菊花堂である。同じ主体が菊花会の名でも販売した事情もおおよそわかった。

その書誌的な結果は絵の内容および台詞の分析結果と照らし合わせて整合していなくてはならないが、描かれた絵の内容の分析を調査協力者とともに行い文献調査の結果をあわせ考えると整合した。根拠になる例をいくつかあげる。大正期の八組については、絵に登場する女性の結っている丸髷は大正期の型であり後の時代には小型化したのと異なる。大通りの街頭の夕刻を描いた絵があるが大正11年4月に完成した広小路通りのガス燈とみられる。遊里を「新地」と呼んでいるのは大須にあった朝日廊をさし中村へ移転する大正12年以前の光景ということになる。描かれている女学生の制服が大正10年に制定されたS女学校のものに似ているなど。昭和期の四組については、いわゆるモガの名古屋版が描かれ登場人物に洋装がまじることなどが昭和5年頃とする根拠になる。これらの絵は名古屋下町の繁華街であった大須観音周辺に諸風景を描いているとみて整合する。庶民の暮らしと接客・芸能関係の実際の出来事を描いたのである。

台詞の言語的性格については1920年代の名古屋方言体系を記述した資料や先行研究がこれまでにないので同じ方法で証明することはできない。むしろ、書誌と絵柄を分析して得たこの結果を根拠にして名古屋市の下町で1920年代にこのような言葉遣いがなされていたと考えることができる。調査の及んだ限りで先行研究に記述されている20世紀はじめ頃の愛知県方言と矛盾する現象がほとんど認められない。疑問のところもわずかにあるが、おそらくは書誌的な問題として説明できる。

絵葉書の台詞が刊行事情と絵柄からして当時大須界限で話されていた言葉であるとすると、その方言としての性格は次のようにまとめられる。近現代の名古屋市方言は「上町言葉」「下町言葉」「芸者言葉」の三つに分けられるが、書かれている台詞は下町言葉を基本として接客の場面が多いので上町言葉と芸者言葉がまじり芸能方面の用語もある。さらに、郊外から来た人たちの台詞には市の中心部と異なるローカルな方言が認められる。たとえばカフェの店内の場面に使われている「居ない」の意の「おりせん」は尾張西部地域の方言であり市内では「おれせん」と言う。客が一宮あたりから来たことを表現したのである。これらの解明をもって本研究事業の方言研究の側面における成果と言える。

音響研究の側面における成果は何よりも

まず大量の名古屋方言発話の音声を良好な状態で録音したことである。この成果はこの先に金森が名古屋弁発音を電子的に合成する研究や共通語発音と変換するシステムを作成しようとする際に基礎資料となる。調査協力者に絵葉書の台詞をよみあげていただいただけでなく前後の討論の様子も録音しているので、最初にめざしたとおり日常会話に近い様相の音声記録できた。

三種類の変母音については先行子音の違いに注目しながらフォルマント軌跡の遷移を指標として伝統的な方言発音と現代風に変化しつつある発音の実態を明らかにした。調査協力者の方言発音はア-イの接続融合が安定的でありオ-イとウ-イの融合は高齢者の方言発音でも実現しないときがあるので、ア-イの融合の例から先行の子音がdである「大根」のダイ、mである「毎日」のマイ、先行子音を欠く音韻環境の「間」のアイに即して観察し次の結果を得た。

伝統発音においては母音開始の冒頭に少し子音の影響があるものの第一、第二のフォルマントがほぼ並行に遷移する。言い換えると二つの母音が一つの融合母音として発音される。それに対して現代風に変化しつつある変母音は、話者が高齢者であっても、先行する子音の影響を顕著に受ける。その結果が母音冒頭の第二フォルマントの上昇となって現れる。上昇した後に少し下降して安定するのである。そして第二フォルマントの値が全体に伝統的な方言発音のそれよりも高くなる。先行子音を欠く「あいだ」の場合は、他の二語と異なって、現代風の方言発音でも第一、第二のフォルマントが並行に遷移する傾向を示すが、やはり、伝統的な方言発音に比べると第二フォルマントの値が全体的に高くなる。この変化が、おそらく、名古屋では「みゃーみゃー」と話すときと評される一因である。伝統的な発音より母音の音色が明るく軽くなっているのである。

フォルマント分析の結果をもとにして、方言発音の方言度を調べる聴取実験を行った。録音したデータ音声から70歳代、50歳代、20歳代の被験者の方言発音を選び、ヘッドフォンで聴いて「名古屋弁の発音らしい」音声を選ぶ方法で計測した。被験者の数が統計に値する数を得た20歳代対象の調査結果では、50歳代の発話者の方言発音に最も高い数値が出た。研究事業者が伝統的な方言発音であると認識する70歳代話者による方言発音は、若年層にとって必ずしも「名古屋弁らしい」と聞こえないのである。この結果となった理由を説明するのは今後の課題であるが、少なくとも、現代の方言音声の標準そのものが変化しつつある実態を示していると言える。

事業年度末に刊行した成果報告書に記述していないが、70歳代以上の高齢者を被験者として、方言発音の音色を評価・識別する聴取実験も行った。被験者が名古屋方言を聞

き分けられることを前提にして、どの程度にそれらしい発音であるか5段階で評価していただいた。結果は研究事業者が伝統的な方言発音であると認識するものと変化した後の方言発音との明瞭な区別が得られていない。これも今後の課題であるが、何をもって方言と認めるかという根本的な問題に結びつくかもしれない。

音響研究としての三つ目の成果は名古屋方言と共通語との変換システムを作成する試みの端緒を得たことである。この研究事業では、辞書レベルで、名古屋方言に特徴的な単語を共通語のそれに置換するシステムを試作して90%台の精度を得た。漢字かなまじりにすると精度が向上すること、誤変換は同音異義語で起きることを確認した。今後、音声レベルで変換するシステムを開発する際に、この研究事業で蓄積した音声データが有効に利用できるであろう。

なお、研究計画では方言アクセントに主眼を置いていなかったが、研究成果報告書付録の音声を録音する過程で重要な発見があったのでここに述べておく。

従来「名古屋方言のアクセントは共通語より遅れてピッチが上がり共通語と同じ位置で下がる」と言われてきたところは再検討を要する。おそらく、その観察は、Voice Onset Timeが短く、ピッチの制御に上げを司るCT筋のみを随意に動かす方言の話者である研究者が内省したものである。名古屋方言の伝統的な発音運動はVoice Onset Timeが長く、ピッチの制御にはCT筋と共に下げを司るSH筋を随意に動かす。「靴」などが頭高型アクセントになるのはVOTが+で声帯が語音の始まる前から動いているので母音が無声化しないからである。同じ理由によって「でゃーこ(大根)」などの平板型アクセントは京都・大阪の高起式平板型と同じく語頭から高い音形になり、東京と違って語頭にピッチの上がり目が付かない。この場合は、名古屋アクセントの方がむしろ早くピッチが上がると言わなくてはならないのである。「さくら(桜)低低高」などは東京式の平板型アクセントの上がり目が後ろへ移動するとは言えない。ピッチを高くするのが遅れるのではなく、語頭でSH筋を動かしてピッチを低くしているのである。京都・大阪式の低起式平板型の語末にSH筋がゆるんで生ずる上昇が名古屋では前へ移動するとみるのが良い。また「きつつきらい(大嫌い)低低高低低低」のような名古屋方言特有の言い回しはSH筋の動きがあってこそ実現できる。このように、名古屋方言の発音においてSH筋の運動が顕著であることを考慮しなければ名古屋方言のアクセントは正しく記述できない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

吉岡夏実、村上晴香、金森康和
「超音波診断装置による母音発声時の舌の位置測定」
『平成25年度電気関係学会東海支部連合大会予稿集』2013 pp2-5 査読なし

〔学会発表〕(計 3 件)

Takashi INUKAI
Comment “On the distribution of the Japanese dialectical accents”
Speech Prosody 7
2014.5 Trinity college Dublin

佐竹美穂、金森康和
「フォルマント変化による若年層の名古屋弁変母音の識別」
電気情報通信学会2013年総合大会
2013.3.21 岐阜大学

佐竹美穂、金森康和
「フォルマント変化による名古屋弁変母音の認識調査」
平成24年度電気関係学会東海支部連合大会
2012.9.25 豊橋科学技術大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 犬飼 隆 (INUKAI ,Takashi)

愛知県立大学・情報科学部・客員共同研究員

研究者番号：20122997

(2)研究分担者 金森 康和
(KANAMORI ,Yasukazu)

愛知県立大学・情報科学部・准教授

研究者番号：50230868

(3)連携研究者

()

研究者番号：